

五月の法話抄録

若人の歎異鈔

釋 法薫 担当

稲津 紀三著参照

親鸞聖人は、「死なざるやらんと心細くおぼゆることも煩惱の所為なり」

不思議なもので、死を思えばかならず不安や心細さがともなってくる。その不安をとらえて無くそうとするから、らちがあかない。

それは、病の根をそのままにして熱を冷まそうとするようなものである。本来ありもしない死というような観念をもつことこそ、まことにまよいの深い愚かものであるということ深く慚愧せしめられれば、おのずから帰命無量寿如来の歡喜の生が現証されてくる。

果なる現証実例

私は、親鸞の教行信証(真仏土) 308

ページ、大無量寿經18ページ第20願の果に歡喜なるもの、寿に入ることを感じている。果は、実りの結果を示しているのではないだろうか。花が咲き、実がみるのである。果が定まらない。祝福された浄土に、果としてとのつたところに向みだされ、願いをそれぞれうみ実行とし、幸福の結果を現証して

いく。

葬儀の斎壇は花と果実で荘嚴されるのは、家で仏壇があるように尊敬、いのちを尊ぶ、恩を忘れず、恩返しを意味し、遺体は、茶毘にふされていく前に、遺(のこされし)体(法の体)としてうやまいの中に莊嚴、さらにこられた人々の慈悲心をよびさます役割となる。茶毘で、舍利となつて、肉体、名譽、すべてのこの世のしがらみを、解きはなち、教えを示す。

九一歳の方の通葬にあたり、自宅に遺体として安置し、三つ折本尊(阿彌陀如来像)と、果実、花、法灯明、香で莊嚴されていた。この方は戦争中、他の方々が現地で食料調達の時、医療

しんらんさまかるた

みんなと

いつでも

いつしよです

親鸞さまは、「一人でお念仏を喜ぶなら二人で喜んでいと思うておくれ。二人で喜べば、三人いると思つておくれ。その一人こそ親鸞なのです」と最後に申され、ご往生されまし



行為をもつて、現地人の病を治療して、食糧を得ていた。その時、四人の中国人たちから「けが人を治して下さい」と言われカゴに乗った。四時間以上経て、建物に、戸を引くと腐つたにおい。

ここで死ぬこと嫌わず。けが人の足はウミとウジ。口でウミを吸い取り、ウジをかみくだく。酒を傷口にかける。大声を出すけが人。二日間焼いたレンガを布でまき、胸にハツカを塗り、汗を出させ、着がえさせた。「大丈夫だ、熱も下がった」この一言で解放された。

このけが人は日本軍を襲う指揮官であつた。この部下がお礼にブタ三頭を先頭で渡し、軍の基地にもどしてくれた。ブタを見ても、銃殺であるが……

た。今も私たちの心の中に、聖人は生き続けておられるのです。

そらに

おおやね

くぼんざん



親鸞さまがお亡くなりになつた後、末娘の覚信尼さまが、父聖人のお骨を拾い、お墓をお建てになりました。これが本願寺の始まりです。今日では東西本願寺を初め、真宗は十派あり、いずれも聖人の

不問に処す、とのことで敵前逃亡の罪でもたすかつた。この軍隊は、川に橋をかける部隊であるが、急な流水で、クイを体に巻きつけていった軍人は何人が死んだ。その時、流れが止まった。足を引きずっていたあの男が敵にもかかわらず手助けしてくれた。「先にけばゲリラがいる。私を連れていってくれ」「あなたを連れていくことはできない」「それではできるだけのことはいしよ」と去りゆく。

ジーブの土ぼこりの後で、「二、三歩おっかけて手を振つて「再会」。戦後、生き残つた私の手柄とならないように秘手記が机のうちにしまい込んであつた。人の一生には教法あり!!

合掌

遺徳を讃え、お念仏のみ教えにいかされた教団を構成しています。

けんしんだいし

しんらんさま

見真大師とは、真実を求め真実に生き抜かれた真の宗教者としての親鸞さまをたたえ、明治天皇より贈られた称号です。

親鸞さまほど人間の真実の姿を深く見つめられた方はないとさえ言われています。



心に如来を思うとき